アクティブ・ラーニング導入が学生の授業意識に及ぼす影響

叶　　俊　文

要約：本研究はアクティブ・ラーニングを導入することが，大規模授業での学生の授業意識にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした．体育原理の講義ではアクティブ・ラーニングとして話し合いや発表，プレゼンテーションなどを取り入れた内容で進められた．平成29年から31年に講義を受講した学生に意識調査を行い，514名のデータを分析した．

その結果，次のことが示された．話し合いや発表によって関心や知識が深まっている．話し合いに加わることは恥ずかしいところもあるが，意欲を損なうことはなかった．体育について新たに考えるようになった．

大規模授業でもアクティブ・ラーニングの効果は認められるが，大学や学部での様々な支援も必要になると考えられる．

キーワード：アクティブ・ラーニング　話し合い　プレゼンテーション　大規模授業

Ⅰ　問題と目的

大学での授業は講義，演習，実習に分かれるように思われる．その中の講義は先生方の独自の進め方が取られているが，概ね先生方から学生への一方通行の形式が取られているように思われる．その理由として，学生にその学問領域の基本的な知識を提供することを狙っているためとも考えられる．大学では高校までの勉強内容と異なり，高校まで触れることのなかった学問領域に踏み込むことが多くなる．まったく分からないような領域については，やはり基本的なことを伝えなければならないという先生方の思いやりが，一方通行の形式になるのかもしれない．昭和50年代の大学での講義は，ほとんどが先生からの一方通行型であり，学生はひたすらノートを取っていくというようなものであったように記憶している．もちろん，板書だけをノートに書くだけではなく，先生が発した話の内容も記録してポイントを押さえていたように感じている．

21世紀に入ると文部科学省はこれからの大学教育について検討を始め，平成17年１月に「我が国の高等教育の将来像」という中教審の答申が示されている（中央教育審議会，2005）．ここでは国が高等教育に責任を負うべきであり，高等教育を社会の負託に十分にこたえるものとして変革することを示している．その中で示されたものが高等教育の多様な機能と個性･特色の明確化であった．そして，個々の学校が個性・特色を一層明確にしていかなければならないとして，特色ある大学教育支援プログラムや現代的教育ニーズ取組支援プログラムというものを動かしていた．特色 GP，現代 GP と呼ばれたこれらのプログラムは，多くの大学が申請したものを審査によって選び，支援していくこととなった．選ばれた大学を公表することによって，「選ばれた大学」と「選ばれなかった大学」の見える化に繋がったこともあるが，大学の立地する地域に対してどのような特色を持つかということは，大学に対して地域活性化の拠点としての役割を持たなければならないことを示したことにもなる．また，入学者受け入れ方針としてのアドミッション・ポリシー，教育の方針としてのカリキュラム・ポリシー，学位授与の方針としてのディプロマ・ポリシーを明確にし，履修形態の多様化による各大学の特色を見える化することも求めていった．

その後も国は大学の教育内容の改革が図られているかを情報公開によって明らかにしようとし

た．GPA 制度の導入，４月以降の入学者受け入れの動向，３つのポリシーが公開されているか否か，キャリア形成を支援する授業科目の実施状況，主専攻・副専攻の導入，授業評価の実施状況，初年次教育の取組状況などがデータとして公開されるようになった（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室，2011）．平成28年度段階で，初年次教育の導入79％，シラバスでの具体的な指示84％，GPA 制度の導入と活用75％，FD（ファカルティ・ディベロプメント）の組織設置87％と大学での導入が進んだ（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室，2019）．また，取り組まれるようになった内容として，事前・事後学習の推進53％，学修ポートフォリオの導入34％，学修時間の目安の記載34％と学生の学習に関する指導もみられるようになり，ディスカッションなどの主体的・対話的な授業や教員と学生の双方向型の授業展開などが叫ばれるようになった．つまり，大学の授業改革である．

先でも述べたように，教員から学生への一方通行型の授業は学生の主体的な学びから考えると主体性は育ちにくいところもある．そこで，アクティブ・ラーニングの必要性が叫ばれるようになった．アクティブ・ラーニングとは学習者が能動的に学ぶことができるような学習方法を指している．教員からの一方通行型の学習方法を受動的な学習方法とするならば，学習者が能動的に，主体的に学習できる方法ということになる．ディスカッションなどを取り入れて主体的・対話的な授業を増やすことや e-learning の導入，グループワークの導入，プレゼンテーションを取り入れた授業によって学生の主体的な学びを育むことが考えられた．主体的な学びは，これからの社会の中で自ら考えて，自ら意見を述べ，発表する力を身につけ，社会でその力を発揮することができるようになると考えられたわけである．アクティブ・ラーニングによる一方通行型の授業からの脱却を図ることになる．

大学の授業においてディスカッションを取り入れたり，グループワークを導入したり，プレゼンテーションを取り入れることができるのは，どちらかというと少人数での授業が主流になろう．つまり，少人数での演習科目やゼミの時間などがそれに当てはまるような気がする．大講義室といわれる100～200名を超えるような大人数での授業では，なかなか難しいところもある．大規模クラスにおいて双方向授業を考えるときにクリッカーなどの応答システムを使うことも進められている（鎌田，2013）．これは教員の出す質問に対して学生がボタン回答することで，正答率やグラフが即時に提示できることになるが，学生の課題に取り組む姿勢や本当に話を聞いているのかはわからないということで，フェイストウフェイスの指導になりにくいことを指摘している．大規模授業でのアクティブ・ラーニング導入の難しさかもしれない．溝田（2007）は40数年前の工学部の主要科目において，担当の先生がテーマに沿って学生とのやり取りを入れながら講義をしてくれたことを回想し，双方向授業のあり方について示している．やり取りをする中には担当教員の学生から意見を引き出すための経験と待ちの姿勢が必要にも感じられる．工学部の専門の授業であることと80人ぐらいの学生数ということが双方向授業の展開のしやすさにも繋がっているとも考えられる．やはり大規模授業でのアクティブ・ラーニングの取り組みを検討することが今後の大学授業において必要になり，それが学生の主体的な学びに繋がることになると考えられる．

そこで，本研究では100人を超える講義において，グループ学習，ディスカッション，プレゼンテーションなどのアクティブ・ラーニングを取り入れることによって，学生がどのような意識を講義に持つようになるのかを確認することを目的とした．大規模授業でのアクティブ・ラーニングの効果を検証するとともに，導入するにあたって考えなければならないことを探っていきたい．

Ⅱ　方法

１．調査対象者

本研究の調査対象者は平成29年から平成31年の体育原理の受講生527名である．その内訳は平成28年度入学学生128名，平成29年度入学学生136名，平成30年度入学学生131名，平成31年度入学学生

132名になる．調査は学内のポータルサイトであるマナバ・コースを利用して，学生が自己回答する形式で実施されたが，回答した学生の数は514名であった．この514名が分析対象者となる．

２．講義内容の概要

対象の講義は「体育原理」という科目である．体育原理は保健体育免許，幼稚園教諭免許に必須の科目であるために，幼児教育コース，スポーツ健康科学コースを希望する学生が主に履修している．平成29年は１，２年生同時開講となり，平成30年，平成31年は１年生の対象科目である．春学期の開講ということで，入学してすぐの１年生に対して授業を進めながらもどのように知識を蓄積させることができるのかという課題がある．

体育原理の講義は大きく分けて４つに分かれている．ひとつは学生が話し合いを進めていくための準備段階として，「園環境が幼児の運動能力発達に与える影響」という論文に掲載されている４つの棒グラフの図を基にして，それぞれの図から読み取れることは何かを話し合い発表することである．二つ目はスキャモンの発達曲線を利用して，乳幼児期，小学校期，中学校期，高校期の発育発達に見られる特徴を話し合い発表することである．三つ目は「身体」という言葉から考えられることを話し合い，まとめ，プレゼンテーションすることである．四つ目は「体育」ということばから考えられることを話し合い，まとめ，プレゼンテーションすることである．身体と体育についてのプレゼンテーションでは，Ａ３版のスケッチブックを使って絵や作図を入れながらのオリジナルの図を作成して，班の代表が教壇前に出てきて発表する形式を用いている．講義では８～９名をひとつの班として話し合いや発表，プレゼンテーションを行っている．

班編成は一度だけ席替えと称して変更している．講義の期間の中程のところでメンバー変更を実施している．最初の班は学生番号順にまとまりを作った班である．これは入学当初ということもあり，学生番号の近い学生が顔を合わせることが多いのではないかと考えて編成している．２つ目の班は学生番号が離れた学生同士で編成する班にしている．前半で話し合いにも慣れてくると考え，後半はばらつきを持たせた班編成にしている．

このように100名を超える講義の中で班編成して，話し合いをして，何を伝えるべきかをまとめ，それを発表するという形式を採用したことは一つの挑戦でもあると考えている．

３．調査内容

本調査は，体育原理の講義において班を編成して，学生自身が考えたことをそのメンバーと話し合い，メンバーから出てきた様々な意見をまとめ，それを発表したりプレゼンテーションするという形式を採用したことが，学生の受講意識にどのように反映されるのかを検討することを目的としている．そこで，調査内容を話し合いや発表に関する意見を拾い上げる項目，話し合い中心の授業に関する意見を拾い上げる項目，メンバーの入れ替えに関する意見を拾い上げる項目，体育に関する意見を拾い上げる項目を作成した．項目は全部で15項目あり，４件法で回答を求めている．これに自由記述の項目を加えた16項目で回答を求めている．回答方法はマナバ・コースのアンケートを利用して，学生独自がスマートフォン上で回答できるようにした．

項目は次の内容になる．「1．話し合いをすることは良かった」「2．話し合いをすることで，自分も考えることができた」「3．発表によって他の意見にも関心を持てた」「4．話し合いをすることは恥ずかしかった」「5．積極的に話し合いに加わることができた」「6．自分の意見を発表することは恥ずかしかった」「7．話し合いや発表によって知識が深まった」「8．話し合いや発表によって，授業の内容がぼやけて分かりづらかった」「9．通常の講義のように，板書中心にした方が知識がつく」「10．発表や話し合いは学生の意欲を損なうものである」「11．もっとメンバーの入れ替えをしてほしかった」「12．毎時間，席を替えてほしかった」「13．話し合いや発表によって，体育についての様々なことを考えることができた」「14．講義の内容は難しかった」「15．体育原理によって，体育について新たに考えるようになった」この15項目である．

４．調査手続き

調査の実施は講義中に行われている．本学独自

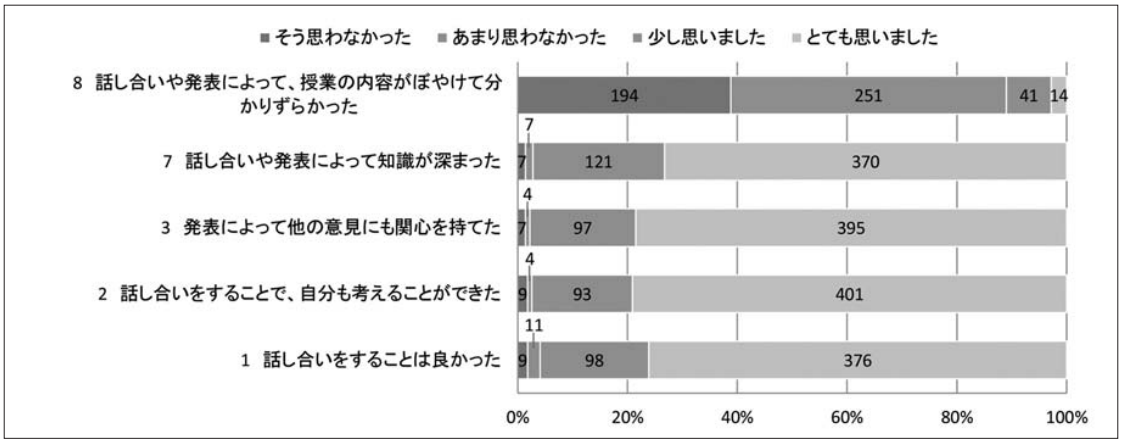

図１　話し合いや発表に関する意見

の授業評価アンケートが学期の終盤に実施されているが，それに合わせる形で実施している．学生に対して，本講義がグループワーク的に行われたこと，班での話し合いや発表を中心にして考えてもらったこと，この形での講義が学生にどのように受け入れられているのかを確かめて，次年度の講義に活かしていきたいと考えていることを伝えている．その点で，教員独自の授業評価と考えてもらって構わないことを伝え，思うままに回答してもらった．スマートフォンに慣れた学生はその場で短時間に完了しているようであるが，後でゆっくり回答して構わないことも伝えている．

このようにマナバ・コースを利用してのアンケート調査は,作成に若干の時間を要するものの,学生の回答のスピーディさと回答結果のダウンロードの手頃さから，たいへん使い勝手の良いものになっていることを加えておく．

Ⅲ　結果

分析対象者514名の回答結果を単純集計していくことにした．つまり，回答の「そう思わなかった」「あまり思わなかった」「少し思いました」「とても思いました」のそれぞれの回答数がどれぐらいの量になっているのかを考えていきたい．それぞれの項目への回答には偏りがあることから，検定を行うことで明らかな差異が認められることが考えられる．その結果を踏まえるよりも，学生の意見がどこに集約されているのかから，講義に対する学生の意識を検討していきたい．体育原理の講義は100名を超える受講生があり，大講義室で行われる講義である．そのような講義において，話し合いや発表を用いた授業の成立についても考えていきたい．

１．話し合いや発表に関する意見

講義の中に班ごとで話し合う機会があり，そこでは自分が考える意見を発表しなければならない．そのような話し合うことや自分の意見を発表するという行為をどのように感じているのかを考える．図１は話し合いや発表に関する意見をまとめたものである．

班を編成しての話し合いや発表について，肯定的に学生は捉えている．話し合いをすることは良かったと考え，その中で自分も考えることができ知識が深まったと考えている割合は９割を超えている．また，話し合いや発表をすることは他の学生の意見にも耳を傾けることも重要になるが，他の意見にも関心を持てたと思っている学生も９割を超えたことになる．こうした話し合いや発表をすることで講義の軸がぼやけてしまうことも想定されるが，講義内容がぼやけて分かりづらかったという項目では，やはり９割の学生が思わなかったと回答する結果となった．つまり，話し合いや発表を取り入れることによって，学生は話し合いをすることを肯定的に捉え，考えることもでき，他者の意見にも耳を傾け，知識も深まっていることを示している．また，焦点が明確であれば，話し合いや発表によって授業内容がぼやけることもなく，考えていけることになるのである．

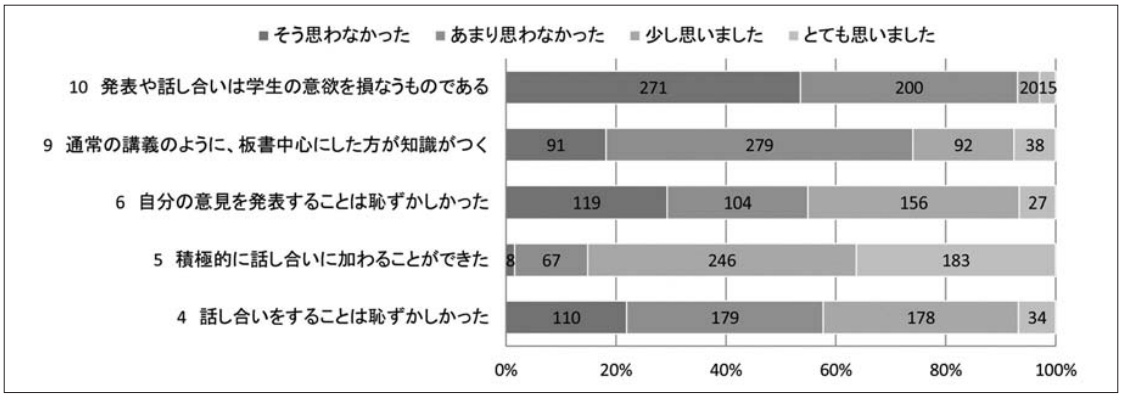

図２　話し合い中心の授業に関する意見

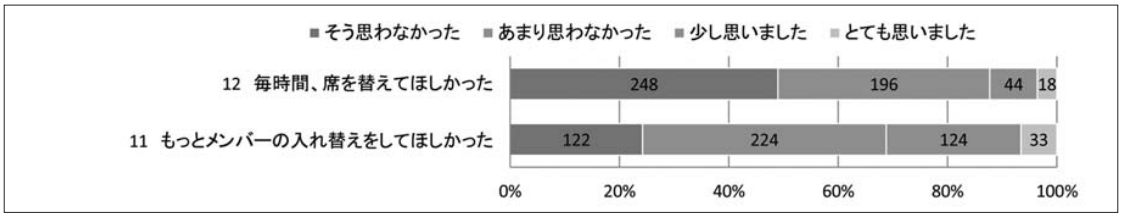

図３　メンバーの入れ替えに関する意見

２．話し合い中心の授業に関する意見

学生にとって班を編成して，その中で自分の考えを発表するという行為は，ためらいも生じさせるものではないかと思われる．まして，体育原理は１年生の春学期という，本当に入学してすぐの講義になる．その講義中に，初めての人とコミュニケーションをとることは学生にとっても難儀な行為になるであろう．その点についてまとめたものが図２に示されている．

話し合いをすることは恥ずかしかった，自分の意見を発表することは恥ずかしかったと思っている学生は５割弱存在している．つまりは恥ずかしかったと思いながら講義に参加していることになる．先ほど示したように，体育原理の講義は１年生の春学期であり，大学に入学してすぐの講義になる．そこで班を作り話し合いをしなさいと言ってもすぐにできることではないことになる．しかし，恥ずかしかったと思いながらも，積極的に話し合いに加わることができた学生は８割を超えている．これは現在の学生の特徴なのかもしれない．そして，話し合いなどが学生の意欲を損なうものになるとも思っていない学生が９割を超えている．また，従来の板書中心の方が知識がつくと思っていない学生が７割になっている．１年生は「板書中心の授業」もあまり経験していないこともあるだろうが，多くの学生が講義中での話し合いや発表が意欲を損なうものではなく，板書中心の方が良しとも感じていないことになる．

講義の中で，班のメンバーと話し合ったり，自分の意見を伝えることは確かに恥ずかしいと学生は思っている．しかし，その話し合いに積極的に加わり，それが意欲を削ぐものではなく，知識もつくのではないかと思っていることが窺えよう．

３．メンバーの入れ替えに関する意見

講義の前半と後半で班編成を替えることにしたが，一度の変更で良かったのかどうかを確かめようとしている．図３にメンバーの入れ替えに関する意見をまとめている．

もっとメンバーの入れ替えをしてほしかったという意見には，７割の学生が思わなかったとしている．しかし，思いましたも３割存在するということは，入れ替えが必要だったとも考えられる．毎時間の席替えということをあまり学生は求めてはいない．毎回の席替えは必要ないけれども，もう少し席替えをしてほしかったとも受け取られる結果となった．

１年生の春学期の授業ということで，様々な不安を抱えてのスタートになる．この段階で話せる

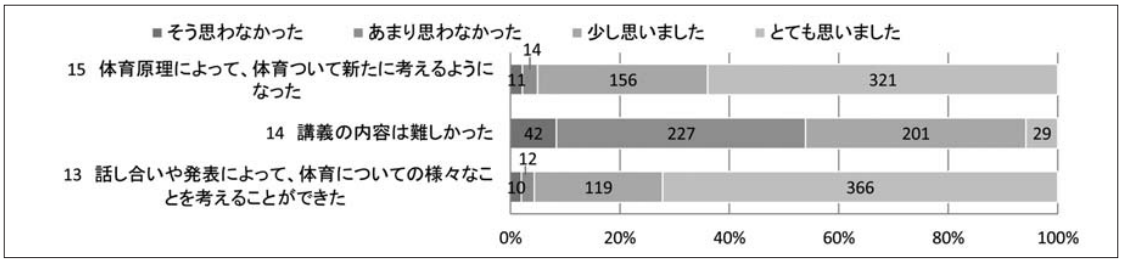

図４　体育に関する意見

友だちや新しい友人に出会うことは，学生本人にとっては重要なイベントになる．もちろん，講義の中で出合うということも考えられることになる．つまり，講義という場所が新しいメンバーと出会う機会になるわけである．その点を考えると，授業の中でメンバーの入れ替えをして様々な学生と出会う機会を提供することも大切になるため，いま一度の入れ替えがあっても良かったのかもしれないと考えている．

４．体育に関する意見

最後は体育についての意見である．講義が体育原理というものであるため，「体育とは何か」「なぜ体育が必要なのか」などを理解していくことが大切になる．少なくとも高校生までの間にイメージしていた「体育観」というものが「新しい体育観」に換わってもらわないと意味がないと考えている．その点についてまとめたものが図４である．

話し合いや発表によって，体育について考えることができたと思っている学生は９割を超えている．しかし，講義内容が難しかったと思っているのは半数の学生である．そして，体育原理の講義によって，体育について新たに考えるようになった学生は９割を超えている．つまり，話し合いや発表によって体育について様々なことを考えて，新たに体育というものを認識してくれたことになる．けれども，それは簡単ではなく，難しいところも含んでいるところが講義内容としては重要な点であったとも考えている．

話し合いなどによって，学生たちは体育というものを楽に考えたのではない．これまでに習ってきた体育というものを省みながら，「あれはいったい何だったのか」と学生たちは考えたのである．高校時代に何気なく行っていた体育の授業に意味を見いだそうとすることが求められ，考えなければならなかったことになる．その考えることが難しかったのであろう．講義内容を難しかったと思いながらも，体育について様々なことを一生懸命に考えながら講義を受けていることが理解できる．

考えるという作業は学生にとって難しいと思われていることになるが，大学生としての基本中の基本である「考えるという作業」ができるように導けていると思っている．講義の難易度としては難しいと思っている学生もあるけれども，あまり難しいと思わない学生もあり，その相互の学生のやり取りが体育について考えることの広がりや深みを生み出していると考えられるだろう．

５．自由記述の概要

自由記述に書き込みのあった480の内容について分類を試みた．分類は話し合いや発表についてプラスの意見，体育観についてプラスの意見，授業についての肯定的意見，授業へのマイナスの意見である．

「話し合いによってより知識を深めることができた」「話し合いをする中で自分にはない意見を知り考えることができた」などの話し合いや発表についてプラスの意見は224記述あった．「体育についての考え方の基礎を築くことができた」「体育のことや子どもの発達についてや身体について様々なことを知れた」などの体育観についてプラスの意見は205記述あった．「考えさせられる授業であった」「楽しく受けることができた」などの授業についての肯定的意見は58記述であった．そして，「内容が難しかった」「レポートが難しかった」「メンバーの変更」などの授業へのマイナスの意見は10記述であった．中には話し合いや発表についてプラスの意見と体育観についてプラスの意見の両方を記述している学生もあった．

このように話し合いや発表を取り入れることに

よって，ひとつのテーマについて自分ひとりで考えて答えを出すよりも，他の学生との意見交換をすることによって幅広い視点で考えることができるようになっていると考えられる．そして，体育に関するテーマを設定することで，これまで自分自身が持っていたい体育へのイメージを変容させることに繋がっていくことになる．もちろん，話し合いを行うことによって初めは恥ずかしいという意識もあったようだが，その意識が積極的に話し合いに参加できるように変わっていくことも事実である．講義の感想を少し示しておく．

○身体とは何か，体育とは何か，遊びとは何かなど，グループワークで話し合い，深く掘り下げて考えていくことができました．体育に対する見方や考え方が新しくなり，体育って大切だなと思うようになりました．
○この講義を受けて，新しい体育観を持つことができました．皆と意見を交換することで色々な意見があるんだと知ることができました．また，初めての人とも関係を持つことができて良かったなと思いました．
○自分のグループで発表したり，グループ内で話し合うことで考えが増えた．そのため，考えに広がりができた．この講義のように話し合いでの授業は今までの机に向っての受身の授業の仕方と違い意見を言ったり聞いたりいろいろなことを考える時間が増えてよかった．
○改めて自分の身体や体育について考えるよい機会となりました．とても充実した授業であったと思います．大学の授業では講義が多いなかで，グループで話し合いや周りの話を聞くという授業形態はより考えを深める事ができ，良かったなと思いました．多くの知識を得る事ができ，今後にも活かしていけたらと思います．

Ⅳ　考察

大学に入学してすぐに開講される教育学部専門講義としての体育原理において，板書を中心とした教員からの一方的な話をしても入学したての学生はチンプンカンプンであろうと考えていた．また，大学に入学して友だちを作るという作業はコミュニケーションを必要とし，講義の中や生活場面でもコミュニケーションを積極的に取らなければならない．コミュニケーションはこれからの大学生活での重要な要素になり，できれば会話ができるようになってもらい，たくさんの学生と話してもらいたいと考えていた．そこで，自分から考えること，他者とのコミュニケーションを取ることを講義の中心に据えるように進めていった．ここではコミュニケーションという観点と知識獲得という点から考察していきたい．

1．コミュニケーション能力の獲得について

本講義では８～９人をひとグループとして，17班ぐらいのグループでの学習ということになった．班の入れ替えについては１度行っているが，もう１度ぐらい実施しても良かったのではないかと考えている．幅広い人とのつながりを考えたときに，チャンスを広げてあげることも大切だったのではないかと考え，今後の課題としていきたい．班での話し合いや発表をするという点については，話し合いをすることで自分でも考えることができ，他の人の意見や他の班の意見にも関心を持つことができ，知識も深まっている．また，話し合いや発表を行うことで講義内容がぼやけてしまうということも学生は感じていない．学生の主体性を重んじると，授業の中で伝えなければならないことが伝わらなくなるのではないかという講義する側の不安はある．その不安が一方通行型の講義にさせる理由にもなろう．しかし，テーマに沿って自分が考えるということで，テーマについての関心も強くなり，話し合いや発表によってテーマについての知識も深まっていると考える．

学生が話し合いや発表をすることについては，やはり恥ずかしいという感覚があるようである．自分が話し合いに参加すること，そこで意見を発表することには抵抗のある学生が多いようで，半数の学生が恥ずかしいと感じている．しかし，それが学生の意欲を損なうものではなく，板書中心の講義よりもプラスになると感じている．つまりは慣れの問題にもなろう．自分の意見を相手に伝

えるという行為は，現代の若者にとっては少ない傾向にあるだろう．SNS を中心に生活している部分もあることから，相手の正面から相手の顔を見て自分の思っていることを伝えることは，普段の生活の中でも数多くあることではない．講義の中で「話し合いを始めましょう」と言ってもすぐにできるものではないし，初めての人と話し合うことは恥ずかしいに決まっている．それでも数をこなすことによって，自分の意見を言えるようになるのだろう．これがコミュニケーション能力の育成に繋がると考える．教員になるにしても，企業に勤めるにしても，求められるのはコミュニケーションのとれる人材である．コミュニケーションのとれる学生を育成するためにも，話し合いや意見交換を取り入れた授業を展開してコミュニケーショントレーニングを進めることも大学教育に求められていることと考えられよう．そのためにアクティブ・ラーニングの導入が推進されているのかもしれない．

100名を超えるような大規模講義は，たくさんの多様な学生と交流できるチャンスにもなる．さまざまな考え方の違いや視点の違いに触れることができることにもなる．このチャンスをどのように活かしていくかが教員側の講義の進め方になる．工夫次第で改革はできるのかもしれない．また，今回の結果から，もしかすると学生側も一方通行型の講義ではなく，アクティブ・ラーニングを求めているのかもしれないことが窺われる．そのことも理解しておく必要があろう．

２．知識の獲得について

コミュケーション能力を身につけることだけが講義の目的ではない．当然のことながら，体育原理についての理解を深めることが目的になる．高校生にとって，保健体育の内容は主要な科目でもないことから，授業の内容は頭の中を通過していくだけの科目のように思われる．その点を再修正してもらい，新たな体育観を構築していくことに体育原理の目的を置いている．そのために話し合いや発表というアクティブ・ラーニングを用いていることになる．

この点についても体育についての様々なことを考えるようになっているし，体育について新たに考えるようにもなっている．もちろん，内容を難しいと思う学生もいれば，難しいとあまり思わない学生もいる．両者が適度に混在していることは学習のレベル的には適切であったのではないかと考える．スキャモンの発達曲線が示すことを考えること，身体とは何かを考えること，体育とは何かを考えること，あそびとは何かを考えることなどが，学生にとっての新たな刺激になったのだろう．もちろん，教育学部に在籍して将来は教師への道を考えている学生であることから，教育という分野の中に「体育」が存在することも理解しているだろうし，もう一度「体育」について再検討しなければならないという意識も学生に働いていたことは間違いないだろう．このような下地を持ちながらも，体育に関するテーマを設定してグループでの話し合いを進め，発表やプレゼンテーションを実施しながら体育という分野について再考してくれたことで，自身の中での体育についての再構築ができたのであろう．これは彼らが現場に立って体育を教えようとするときに，ひとつの大きな指針になるのではないかと考えている．あるいは，１年生ということも考えると，これが土台となり，その上にこれからの体育に関する授業が積み重なっていくことで「体育の授業で指導する」という意味が確立されていくことであろう．その第一歩を踏み出させることができたと感じている．

しかし，今回の内容には具体的にどのようなことを理解しているのかを測ってはいない．授業では３～４回のミニレポートと最終的な確認レポートによって評価している．その目安としての各年度の評価の平均値は「良」の範囲になっていることから，大方は理解しているということが言えよう．ただ，３～４回のミニレポートでは理解していると判断できるまで再提出を課している．それをクリアしていった学生たちであることから，理解しているのではないかと考えたい．理解度を知るための具体的な方略については検討する必要があるだろう．

３．今後のアクティブ・ラーニング導入の課題

大規模授業でのアクティブ・ラーニングの実践について佐野（2019）は次のことを述べている．

それは一人のファシリテーターの目で各グループの話し合いの状況を把握することが難しいという点である．グループによっては活発に意見交換できているところもあれば，うまくできないグループもあることからグループ間での差異が生まれ，学びの成果に差ができてしまうことになる．これを解消するためには，複数の院生や学生アシスタントの介入が必要になる．つまり，SA や TA 予算ということになる．大規模授業でもアクティブ・ラーニングを取り入れて，学生の主体性を育てるのであれば，積極的に SA や TA を活用できるような体制を大学や学部が取る必要があるということである．

実際に200人や300人の学生に対して，単独で講義を進めている先生も存在する．その状況だけでも頭が下がる思いである．しかし，一方通行型の講義になりがちな中で，より効果的な講義を展開するための手立てというものを組織として検討することは，組織としての責任でもあるように考える．それとも学生の主体的な学びは，ゼミや小規模授業に任せるということにするのであろうか．

また，ゼミや小規模授業であればできるというわけではない．笠井ら（2019）は少人数規模の初年次での演習において，学習習慣の定着を促すためのアカデミック・スキル教育の導入について，担当者による獲得する知識の偏り，知識の定着の確認・測定，教員のサポートのあり方などの問題点が浮き彫りになり，改善されるべきことを述べている．どのような力を身につけさせたいのかについての反省と再検討を教員側が繰り返さなければ，意義あるアクティブ・ラーニングにならないことを示している．導入することに意義があるわけではない．それは事前事後の学習内容や時間をシラバスに書き入れることや授業評価アンケートをすることも同じであろう．導入するだけが大学教育改革に繋がるわけではない．本分である授業において学生が内容を理解できることが一番重要になってくる．そのための方略を大学や学部が検討することが大規模授業を受け持っている教員への後押しにもなり，学生が主体的に学ぶことに繋がっていくことになると考える．

最後に

日本私立大学連盟（2018）は未来を先導する私立大学の将来像をまとめている．私立大学の機能・役割として，世界のリスクを回避できる多様性と実践的な教育を推進すること，私立大学の多様な教育研究によって国民の知的水準を底上げすることを挙げている．北から南まで海岸線をもつ三重県において，海洋で起きているプラスチックゴミの問題は世界規模の問題である．それをどのように学生に伝えるのか．あるいは SDG's への対応をどうするのか．どちらも取り上げることは小さいことになるが，大きく広がりを持たせることができる課題である．このようなことを学生が主体的に学んでくれれば，世界のリスク回避に繋がるような気がする．

参考文献

中央教育審議会（2005） 我が国の高等教育の将来像 文部科学省中央教育審議会答申

鎌田光宣（2013） 大規模クラスにおける双方向授業支援システムの現状と提案 情報処理学会第75回全国大会講演論文集；463-464.

笠井高人・迫田さやか・内木栄莉子（2019） 初年次におけるアカデミック・スキル教育－アウトプットを重視した実践報告－ 同志社大学学習支援･教育開発センター年報10;19-29.

溝田武人（2007） ある双方向授業から学ぶこと 工学教育55-3；186-187.

文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2011）大学における教育内容等の改革状況について（平成21年度）

文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2019） 大学における教育内容等の改革状況について（平成28年度）

日本私立大学連盟（2018） 未来を先導する私立大学の将来像

佐野淳也（2019） 大規模授業におけるアクティブ・ラーニング実践報告 －政策学部NGO・NPO論事例からの考察－ 同志社大学学習支援・教育開発センター年報10；65-74.

Effects of active learning on the attitudes of university students

KANO Toshifumi

Summary

This study intended to examine the effects of active learning on the attitudes of university students vis-a-vis the discipline of "sports philosophy". The study was conducted on a large class over 100 students. The active learning classroom session comprised of a discussion, opinion sharing, and group presentations on a given topic. Subsequently, the participating students were subjected to an examination and 514 samples（attended students of 2017~2019）were analyzed.

The results of the analysis revealed that discussions among members of a group helped students think more deeply about the subject at hand. Some students were hesitant to share their opinions in public, but were able to actively participate in the class activities. In sum, students attending the active learning session were able to obtain new ideas about the subject.

It is thus important to apply active learning in classes with a high number of students. For proper implementation, the university committee or faculty would need to organize the required support systems for this methodology.

Keywords : active learning, group discussion, presentations, large class

The authors would like to thank MARUZEN-YUSHODO Co., Ltd.
（https://kw.maruzen.co.jp/kousei-honyaku/）for the English language editing.